

ープとさわぐ。食事のコースが終ると外のテーブルで各国の歌を交換した。40カ国・約100人もの研究集会は盛会であり、日本人が5人も参加したのははじめてであろう。ブカレスト場所もまさに終わろうとしている。明日から横綱を除く年老以下若者は地方巡業に出発する。横綱はあと2日頑張らなければ日本には帰れない。(○)

6月24日(土)晴。木梨、箕輪両氏は飛行機でウィーンに発つ。仲良しのメキシコ人と共にホテルの前で記念写真を撮る。今永母子とルーマニアの Purcean 氏が植物園に案内してくれる。帰宿 12:30 pm。午後、今永母子が黒海沿岸に行き泳ぎたいといわれるのでお供をして切符を買いに行く。明日は早いのでチューリッヒで買ったウィスキーを全部空にする。(○)

6月25日(日)晴。ホテルを朝早く発って空港へ。メキシコの友人とまた会う。1981年の京都大会での再会を約す。8:55 amの飛行機でモスクワへ。モスクワ空港で買物。一路飛行機は日本に向う。(○)

6月26日(月)晴。成田着 10:45 am。バスで羽田に行き、4:40 amの飛行機で福岡着 6:25 pm。教室員全員の出迎えを受ける。これでフライブルグ、ブカレスト場所も仕上げである。地方巡業はどうだったろうか。感じだけの星とりも11勝4敗と、九州場所の15戦全勝の若ノ花には及ばないが、北の湖と相星、まあまあ成績といえよう。これからの若手の海外場所の成功を祈ってこの日誌を終る。

2. 森林の水土保持機能の評価に関する私感

九大農 竹下敬司

私達の住んでいる福岡市は、今年の春から異常な濁水に襲われ、市民生活がおびやかされている。これを契機に水源地帯である上流山岳地の水源かん養機能に対する社会的な関心もかつてないほどの高まりをみせている。水源かん養機能を含む森林の公益性機能については、環境保全上の見地から、最近、その具体的評価を行うべく調査研究が進められているのであるが、未だ、社会的な用語で、これを提示しうる段階となっていない。もし、森林の機能が現実に高いのであれば、これをアピールする絶好の機会とも考えられるのであるが、残念な現状である。

現在、社会でとりあげられている諸事業、計画、それらに伴う評価等は、その根拠を客観的な数値において行われていると考えられている。一方、森林の水源かん養機能等は、古くから言い伝えられ、広く誰でもが聞いている事柄であるにもかかわらず、それがとかくムード的であり、数量化されていないのが実情である。そのため、具体的な設計要素としては、とりあげられておらず、森林にタッチしている者としては、非常に口惜しい気がする昨今となっている。

山地流域での土や水の問題は、一面では、クールな物理現象と考えられるのであるが、それに関与する要因が、多数にのぼるため、それを総合する場合には、単純な物理現象としては取扱えぬ複雑な反面を持っている。つまり、部分的には物理的な数量知見を有するが、全体的には、確率的な数量化

に頼らねばならぬといった内容のものとなっている。観念的には、確率論と物理論の結合は可能と考えられるのであるが、数学に弱い筆者にとっては、この方法論的な問題が、この種の研究を行う上での第一の悩みとなっている。

山地、森林下での水や土の問題は、複雑ではあるが、少なくとも、我々にとっては、最も身近なフィールドでの事柄であり、これに関与する知見も、ある程度は、ととのっている現況下にあるとも考えられるのである。つまり、現状でも、適切にとりまとめを行えば、社会的にも役立ちうる数量的知見を提示しうる段階にあるのではないかと思われる。

方法論的な自信のなさを感じながらも、森林、林地の水土保持機能の定量化を目標にしているのが、私の最近の研究テーマである。

3. 林業・北と南

九大農 柿原道喜

北海道足寄での10年余の生活に別れを告げ、南国博多に帰って、早いもので8カ月になる。最初は、スギやヒノキの話聞いてもどうもピンとこず、これが北海道ボケというものであるかと思ったりもした。その後、山をみる機会にも恵まれ、だんだん山の様子もわかってきた。そこで、今日は、九州の山と北海道の山を比較しながら、これまでに得た感想を思いつくままに述べてみたい。

北海道の人はよくいう、「九州は林業の先進地で育林技術もすぐれている」と。確かに、新聞、雑誌などに紹介されている、スギ、ヒノキの立派な造林地と、野ねずみに喰われたカラマツ造林地、寒さの害のため2次林のようになってしまったトドマツ林とを対比するとそういうことになる。しかし、九州でも標高1,000 m以上にもなると、点々としか生えていない造林地があり、また、あきらかに生育不適地と思われるところに造林が行われたりしている。北海道の良い山と九州の悪い山を比較すると、北海道の方がはるかにすぐれており、北海道が九州にくらべ、特に劣っているということはない。

北海道のカラマツの造林地を眺めて思っていたことに、通直な木が少ないということがある。しかし、スギの造林地をみると、本当に通直なものは少なくカラマツとあまり変わらないということも気のついた点である。

次に間伐の問題にふれてみると、第1回目の間伐を有利に行う為に、最近、伐り捨て間伐の必要性が強調されている。筆者も、カラマツの伐り捨て間伐を試みようと思ひ、何度も現場まで行ったが、とても惜しくて伐る気がしなかった。スギ、ヒノキでは実行されているので、「さすがは違う」と感心したりもしていた。しかし、今回、実際に間伐されているところをみたが、伐られているのは、劣勢木、あるいは曲り木など、常識で考えて伐って惜しくないものが伐られている。これならやり易いと思ひ、できるのが当然という気がした。